

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

森永 駿

論 文 題 目

ハイデガー『存在と時間』における実存と真理

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	布施 哲
委員	名古屋大学教授	吉武 純夫
委員	名古屋大学教授	齋藤 文俊
委員	名古屋大学准教授	鈴木 真
委員	名古屋大学名誉教授	宮原 勇

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論は、ハイデガーの『存在と時間』(1927年)における真理論を検討することで、真理概念としての「開示性」の内容とその位置づけを明らかにすることを目的としている。ハイデガーによれば、現存在は、自分以外の存在者と出会う場合には、その存在者のあり方に関する理解が成立している。そのような存在者の存在の「理解」(ないしは「了解」)を、開示性という。しかも、現存在は特異的に自分自身の「あり方」をも「理解」しているとし、その意味での「開示性」も成り立っているという。本論では、そのような「開示性」の位置づけを問題としている。

筆者は第1章で、現存在の根本的構造である「世界—内—存在」の一要素として組み込まれている「世界」の分析を行う。ハイデガーは、世界の世界性を道具連関として捉えるが、そのような世界性において、他者(他の現存在)がどのように位置づけられるかについて論じられている。筆者は、特に他の現存在に対する「顧慮的気遣い」に関して、具体的な例を挙げながら詳しく検討している。

第2章では、世界内存在の「内—存在」の分析が行われている。内—存在とは、慣れ親しんでいる世界のもとに滞在しているという現存在の「あり方」を意味しているが、この内—存在は、現存在が本性上備えている「開示性」によって可能となる。そして開示性が「情態性」、「理解」、「語り」から構成されていることが明らかにされている。

第3章では、ハイデガーが世界内存在としての「現存在」のあり方を端的に捉えた「気遣い」の時間的構造である「時間性」が論じられている。そして、現存在の根本様態である「本来性」と「非本来性」の内容がそれぞれ吟味され、非本来的なあり方から本来的なあり方に転換するという事態が、時間性の「時熟」(時間構造の生成を「時熟」という)の仕方の違いであることが示されている。ここまでの議論は、最終的には「実存の真理」と名付けられたテーマであり、現存在が如何にして「本来的なあり方」に達しうるかという問題である。

最後に、第1～3章までの議論を踏まえつつ、『存在と時間』第44節における真理論が検討される。〈ものと知性との合致〉(adaequatio rei et intellectus)という伝統的「真理」概念から分析は出発し、合致の可能性の根拠として「発見」と「開示性」との関係が検討されている。その結果、ハイデガーの議論を、整合性を保ちつつ解釈するためには、「開示性」の概念を、「広義の開示性」と「狭義の開示性」とに区分する必要があるとされる。「狭義の開示性」とは、第3章までの議論で扱われてきた「実存の真理」であるが、筆者によれば、ハイデガーの議論では、真理と非真理を区別する真理基準が明確であり、その限りにおいて、「狭義の開示性」を「真理」と規定するに足るとされる。それに対して、「広義の開示性」に関しては、それは存在者がひたすらわれ

論文審査の結果の要旨

われにとって出現することではなく、その際に、そのような存在者の「存在」に関するわれわれの理解が成り立っている以上、「非真理」は成立し得ない、と筆者は主張する。つまり、「広義の真理」とは伝統的な真理論で論じられている「真理」概念であるが、ハイデガーの議論においては「偽」の可能性が見いだせない以上、真理基準も見いだすことはできないと筆者はいう。

〔本論文の評価〕

本論文の優れた特徴として挙げられるのは、第1章から第3章までの記述において、「本来性」という「実存の真理」に至る議論が、筆者独自の具体的事例に即して丁寧に解明されている点と、第4章において展開されている「開示性」に関わる「真理性」の議論において、ドイツの分析哲学系の哲学者エルンスト・トゥーゲントハットによるハイデガー批判にまつわる議論が検討され、さらに国内外の先行研究を踏まえながら、自らの主張が十分に展開されている点である。

前者の特徴に関して、特に「実存の真理」としての本来性が実現されるときに時間性の分析においては、一般的には〈時間性は「将来」から時熟されるのであり、頽落は「現在」において生ずる〉と解釈されている。これに対して、筆者は、本来的時間性でも、「先駆」という、「将来」(未来)という時制から時熟されるのであるが、しかしそのみならず「現在」においても、「瞬間」(「突然」という意味)において決意され、さらにはそのような「本来的自己」とは〈そもそも本来それであったところの自分〉であるという意味で、「既存性」(過去)が関わっているものであり、その意味では三つの次元において展開されると主張する。また、「非本来的時間性」に関しては、「現在化」において世界の内にある事物の元へと「頽落」しつつも、ある状況の中に既に投げ込まれている(過去の側面)と同時に、世間的な公共性の枠組みを前提とした将来的な計画性(未来の側面)へと頽落していると言える主張する。このような時間性の重層性の指摘はハイデガー解釈として貴重である。

後者の特徴に関しては、トゥーゲントハットが、「広義の発見性」と「狭義の発見性」とに分けて分析したのに対し、筆者は、「広義の開示性」と「狭義の開示性」とに分け、結局トゥーゲントハットの批判は的外れではなく、一定の意味をもち、結局、〈ハイデガーの「真理」論では「偽」の可能性が十分に規定できていない〉という結論に辿り着いている。

本論文では、先行研究についての実質的議論が十分ではないものの、哲学理論の中でも、難解なハイデガーの理論が比較的わかりやすく提示されており、問題点も明確に提示され、新たな視点から解明されている。以上、多面的な視点からの口述審査を経て、当審査委員会としては、『存在と時間』における実存と真理の問題を究明した本論文は、博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断した。